

OUMC

大阪大学山岳会 会報

No.21

2019年7月

発行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

創立70周年に想う

記念事業と現役育成が課題

会長 大野 義照

新制大学1期生が入学した1949年春、それまでキャンパスの異なる学部ごとに活動していた山岳部が大阪大学山岳会(部)として統合された。今年はそのから70周年となる。これまで50周年には長野県白馬村の対岳館に記念碑を建立、そして60周年には山岳会の記録を電子化し、ホームページを作成した。昨年



からは70周年記念事業を検討しており、75周年までの5年間にできることから実施したい。

現在提案されている計画をいくつか紹介する。①六甲山全山縦走Ⅱ中間点(摩耶山)の宿泊施設に1泊し、OBと現役山岳部員の懇親を深める。コースは各自の体力によって決める。懇親の場では最近の海外登山の報告をする。時期は10月②吹田キャンパスのクライミングウォール

体験Ⅱ現役部員のコーチによるボリダリング。10月に①とセットで行う③阪大梅の木寮のあった神の田圃に現存する早稲田の小屋での懇親会④白馬集会前後の登山⑤現役部員、OB合同の夏山合宿⑥現役部員も参加する75周年記念海外登山など。

ここ10年の山岳部を振り返ると、60周年の2009年前後は部員が減り、廃部の危機にさらされたが、関係者の努力と協力によって危機は何とか乗り越えることができた。そして2012年に吹田キャンパスの体育館にクライミングウォールが設置されると一転して入部者が増え、今や部員数は実働20名余りになっている。登山のためのトレーニングととらえていたボリダリングが東京五輪の種目にもなり、スポーツとして取り組む学生が増えたためだ。そのような部員を多く抱えながら、登山を目的とする山岳部をどう活発にするかが課題になっている。それには、まず安全に夏山を登る技術を伝える

ことである。次いで雪山を登る技術を伝えたい。こうした状況を背景に記念事業の①②⑤案が生まれたわけ、その成果として⑥が実現すれば、これほど喜ばしいことはない。

ここで私が山岳部に入った時の状況を振り返ってみたい。1963年に入学し、早速、山岳部を訪ねた。大学での居場所を求めていることであつた。他の運動部であれば高校までの経験が重きをなすが、山岳部ではそれほど重要ではない。四国の野山や川で遊んだ経験が役に立った。5月の新人山行ではOB2人に連れられて大峰山に登った。新人は3人。P29で逝つた渡部洋君もいた。その時のルートを記入した5万分の1の地図が手元に残っている。天川村から八経ヶ岳に登り、狼谷から双門の滝を往復。山中3泊し、尾根通しに天川村に下つた。他に登山者はなく、深山幽谷の感があり、苔がとても美しかった記憶がある。今年5月、行者還トンネル登山口から日帰りて八経ヶ岳に登った。登山口には車があふれ、鹿の食害で山は明るく、鹿が食べないコバイケイソウだけが目立つなど山は大きく変わっていた。

当時、大学は7月の第3週から夏季休暇に入り、20日ごろの梅雨明けを待って夏山合宿に出かけた。その時は立山東面のタンポ平にBCを設

けた10日間の定着合宿で、未知の岩場を登り、劔岳や十字峡往復、御前谷雪渓での雪上訓練などをした。新人は12人に増えていた。そのあと7〜10日間の縦走に出かけた。この夏の経験で食、住の生活技術を含む一通りの登山技術を学んだ。

近年、大学の学年暦は大きく変わり、1学期を終了して8月の第2週から夏季休暇に入る。だが、8月も中旬になると、山では雪上訓練に使う雪渓の雪は減り、天候は不安定。そのうえ一般登山者が多い、と登山条件は悪くなる。また、長期間の合宿を行う余裕もないようだ。山の状態も学生の環境も大きく変化している。新たな活動計画を考えなければならぬと思う。

山岳会の目的は2つ。現役の援助と登山活動を通しての会員の親睦である。山岳会が現役を物心両面から支援することは今後も変わらない。会員OB、OGの登山活動は定年までは時間が取りにくくて困難な場合が多いが、定年後にまた山登りに戻ってくるのを歓迎したい。

東京支部では野田憲一郎氏を中心にOBの登山活動がずっと続いている。石原敏雄氏や井上太一氏の活発な活動は会報でも報告されている。また、仕事では現役の野口明氏、畑秀信氏らの海外登山活動も注目され

る。関西でも、仕事で現役の奥山宏臣氏らは毎年5月連休に北アルプスに出かけ、最近では科野昌蔵氏の呼びかけで土、日に近郊の山にも出かけている。

今年の白馬集会は20回目になる。

創立時からパイオニア 70周年迎えたOUMC

野田 憲一郎

寄稿を依頼されて2005年発行の「後立山からヒマラヤへ 戦後半世紀の歩み」を読み直してみた。1949年に阪大山岳会が結成された時の情景が目に浮かぶ。太平洋戦争で抑圧されていた登山への欲求が戦後、一気に噴き出したかのように後立山連峰や黒部峡谷に困難な目



標を定めて向かった先輩方の情熱が行間にあふれている。OUMCは

創立時からパイオニアだったのだ。私は56年に入学、早速、山岳部の門をたたいた。今思えば山岳部が設立されてまだ10年たっていない時だった。70年の歴史からすれば草創期に

昨年の会報でもお願いしたが、一人でも多くの方に参加していただきたい。集会では70周年記念行事についても相談したい。また、集会の前後に同期会で登山を計画していただくのも一興だろう。

現役として登山に励んでいたことになる。あまり意識することもなかったが、先輩たちの情熱を受け継いで山岳会の伝統の一角を積み上げてきたのだろうか。

50年代後半と言えは世の中もようやく戦後の貧しさを脱し、これからどんどん豊かになっていくぞとの希望に満ちた時代だった。53年のエベレスト登頂、56年の日本隊によるマナスル登頂が大きなきっかけで登山に関心が集まり、山岳部への入部者も増えていった。山岳部創設者の一人である徳永篤司会員がマナスル遠征隊員だったこともあり、ヒマラヤを近いものと感じたものだ。

1年生の春は毎週、六甲山で岩登りの訓練、夏は劔岳で合宿、そのあと槍ヶ岳まで縦走した。冬は八方で

スキー訓練。とにかく登山が楽しくて、年に90日以上も山に入っていた。翌年から部員数が急増、山岳部の力が充実していく一方、テントなど共同装備の準備が追いつかない時期だった。

夏の合宿に冬用テントを使わざるを得なくて「暑くて寝られない」とクレームがついたり、古いテントが槍の肩で強風のためビリビリと裂けてしまい、縦走を諦めたりしたこともあった。春山では雪洞をよく使った。ザイルは重い麻の12ミリで、部屋のあった中之島の医学部記念館屋上から懸垂下降して堅いザイルをほぐした。寝袋などは米軍の放出品が中心だった。食料もまだ研究が不十分で、食料係は、少ないとか、まずいとかやられ、後にインスタント麺(玉蘭)が出たときはうまくて感激したものだ。

当時の風潮はヒマラヤの高峰の初登頂に刺激されて、キャンプをいくつも重ねて登頂を目指す極地法(ポラーメソッド)の研究が盛んだった。われわれも58年春に鹿島槍大狗尾根でキャンプを3つ出して五竜岳を往復するなど極地法を勉強した。これを踏まえて59年春には烏帽子小屋をBHにしてキャンプを4つ出し、24日間かけて赤牛岳から黒部川上廊下横断を果たした。極地法の展

開には大勢の力が必要だ。この時は33人が参加した。部員の層が最も厚い時期だったのではないか。

登山のマナーにもそれぞれの山岳会の文化がある。このころ、大学山岳部のシゴキがしばしば問題になった。先輩と後輩のヒエラルキーがはっきりして、食事の順番、荷物の量などに差別があると言われ、「新人エレジー」などという歌もあった。しかし阪大山岳部の文化は違った。新人よりも2年、3年の部員の方が荷物は重かった。新人がリーダーに尻をたたかれるようなこともなかったと思う。

私は60年に卒業し、名古屋、東京で会社生活を送ったので、その後の山岳部の様子が不案内なところもあるが、61年にはP29の第1次遠征があった。これには会社の許可がなくて参加できず、悔しい思いをした。第4次隊にも誘われたが、仕事の都合で断念せざるを得なかった。悲しかった。P29初登頂には誇りを感じるとともに、登頂した2人の遭難は今も心が痛む。

62年には阪大梅の木寮が建設された。現役部員が資材のボツカを担うなど積極的に協力した小屋だった。スキーに行ったり、夏にはOB会で集まったりと、よく使わせてもらったが、あの小屋が短期間で取り壊し

になったのは寂しかった。

私はその後、山への恩返しのため山岳部の環境保護活動や「山の日」制定にも関わってきた。退職後のある年、関東地区に住むOBと一緒にピッケルのさび落としに行こうと声をかけてみると、たちどころに賛成の声が上がり、冬の八ヶ岳に行った。以来、毎年5月の山行が続き、鳳凰三山、常念、奥秩父、北八つなどに登った。さすがに最近日は帰りのハイキングになったが、やはり若いときからの仲間が信頼できるし、何より気が置けなくて楽しい。一緒に歩いているだけで心が和む。

OBの交流と言えば、対岳館での白馬集会和関東地区在住会員でつくる東京支部の懇親会がそれぞれ年一回開かれている。これも楽しんだ。参加者の皆がそれぞれの時代の山岳部を背負ってきた。年の離れたメンバーと自分の時代の山岳部の様子を語り合うと、OUMCの歴史の厚みを感じる。

私たちの時代は未知の領域を見けることができたが、今、日本の山にフロンティアは残っているのだろうか。今後のOUMCは創立以来のバイオニア精神をどんな形で表現できるのか。若い会員たちとそんなことを語り合いたいと思う。

(元副会長、60年経済学部卒)

57歳にして念願達成

台湾の大峽谷遊行

畑 秀信

国内の厳しいゴルジュ遊行は学生

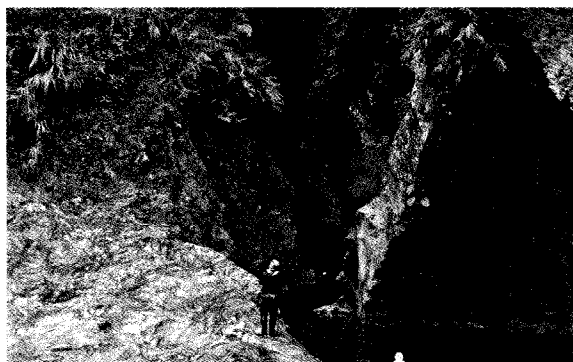
時代から幾度となく経験していたので、1980年代、日本人が沢登りというスタイルを台湾に持ち込んで未知の沢を開拓し始めたことを知った時は、次に求めるのはこれだと思つた記憶は残っている。ただ、就職したばかりの当時は、夏に5日ほど休みを取るのが精一杯で、10日もかけて海外の沢に出かけることなどは

でも無理な状態だった。

国内で目指していた剣沢大滝もチャンスが逸するうちに、厳しいゴルジュを登るモチベーションは失せ、岩魚を釣りながら沢でのんびり息抜きをする山行が自分のスタイルと決めてしまふようになっていた。そして、57歳にもなると、台湾の沢も一度は行つてみたいという気持ちは残つてはいるものの、積極的に自分で計画しようというところまではならなかった。

昨年の秋、東北の虎毛沢に釣り山行に行った時、旧友の木下さんにはつたり会つたのが今回の台湾行きの始まり。彼が台湾の沢に足繁く出かけているのは知っていたので、私が通っている四川省の山に彼を連れていくことを条件に、台湾の沢に誘ってもらう約束を取り付けた。

行き先は台湾南部、大崙溪の第一支流、馬哈武溪(マールールシー)。中国語読みでは「マーハーウーシー」となるのだが、正式な読み方は不明だ。台湾原住民の高砂族の読み方か



最初の通過不能ゴルジュ。高巻きに約3時間かかった

もしれない。沢は台東県池上から入り、源頭は標高2,400^{メートル}くらい。2016年12月に台湾パーティーが8日間かけて下半部を越え、左の登山道に抜けている記録があるのみで、2万5千分の1の地形図と、古い5万分の1の登山地図しか情報がない。

日程は4月6日から15日。雨季に入る前のぎりぎりの時期だ。隊のメンバーは、木下さん(44歳)、藤卷さん(52歳)、宮崎さん(37歳)、片野さん(24歳)と畑(57歳)。この時期に休みを取れる人などそういるわけでもなく、お互いに知り合いに声をかけて寄せ集めたメンバーだ。年齢も山経験もバラバラだが、木下さんと藤卷さんは台湾の沢の経験者なので心強い。準備は2人の知見をもとに進めた。

準備でのポイントは、装備の軽量化とウエアの選択。8日間の食料となると相当な重さになる。食料、個人装備ともグラム単位で計測して軽量化に努めた。どうしても軽量化できないのがウエアだ。2,000^{メートル}を越えても泳ぎがあることが予想されるため、寒さに耐えられるウエツトスーツ必携だ。木下さん、藤卷さんは昨年正月に今回と同じ水系の相原溪で水が冷たくて敗退したために、ウエア選択にはより慎重だ。

私は、冬のダイビング用ウエツトスーツを用意した。3月の奥多摩の沢でテストし、寒さ対策は問題ないことは確認していた。難点は3^{キロ}以上もある重さと、足が思うように上がらないこと。実際、足が上がらないため岩の乗越しなどで大変苦労し、体力の消耗は相当なものだった。岩の乗越しや歩行で何度スリップしたことか。おかげで8日間で足はあざだらけになってしまった。荷物の重さについては、日ごとに食料が減って軽くなるはずが、ザイルなどが水を含むため一向に軽くならない。泳いだ後、岩棚にザツクを引き上げる時などは、水がザツクに入り込んでいるので、瞬間的に20^{キロ}以上の重



源頭の賛雅楽山頂で。中央が畑

さになる。

沢の様相は、支流とは言え、日本の本流遡行の数倍の長さで規模。源頭の賛雅楽山まで水平距離で31^{キロ}。流れは速くない代わりに、とんでもなく長い深々とした漕が数限りなく出てくる。ザツクを浮袋にしたり、引つ張ったりしながらプカプカと泳いで行く。水流に抗した激しい泳ぎは殆どないので悲壮感はなく、見上げると数十^{メートル}上まで兩岸が迫った狭いゴルジュに感動すら覚える。100^{メートル}ぐらい泳ぐ漕が毎日何度も出てくる。泳ぎだけで3,000^{メートル}ぐらい稼いでいるのではなからうか。経験者2人もこんなに泳ぎの続く沢は経験したことがないと言う。

深い漕の先に直瀑があり、通過できない所が2カ所あった。いずれも先行者の記録には記載されているので、我々はトラブルもなく無難に高巻くことができた。それでも1回3時間ぐらいを要する大高巻きだ。

漕がないところで大変だったのは巨岩帯の通過だ。荷物が重いのと、岩がヌルヌル滑るので、容易には越せず、体力もすぐ消耗してしまう。日本だと簡単に越せそうな所も、できるだけザイルを出して慎重に行動する。なんせ、この深い谷の中で、1人でも怪我をしたら、救援要請もできずどうしようもないのだから。

私自身も沢の途中で一度スリップし、膝をねじってしまった時は、やばいと思った。幸い、テーピングで応急処置をした翌日には治っていたのでホツとしたが。最終日の下山中にも残り12^{キロ}ぐらいの地点で、気の緩みでスリップし、膝の靭帯を痛めてしまった。この時は荷物をメンバーに持ってもらい、足をひきずりながらも、翌朝、下山口に着くまで歩き通せた。が、車に乗ったとたんに緊張の糸が緩み、歩行困難な状態になってしまった。帰国後、今も病院通いが続き、エントリーしていた富士山トレランレースは欠場せざるを得ない代償となった。

結局、遡行は、上半部を割愛した先行者と同じ日数で源頭まで完全遡行するという最高の結果を得ることができた。無理な計画とは分かっていたものの、毎日10時間歩き続けた5人の忍耐力(最終日は24時間行動)、藤卷さんの確実なリード力、ち密な木下さんの読図力、ルートフラインディングなど皆の力を結集したおかげだ。57歳にして初めて台湾の沢に挑んだ話など聞いたことがないという私へのコメントも有り難い賛辞と素直に受け止めた。

下山に使った廃棄林道は完全に荒廃しており、何度も迷ったため、翌朝まで歩き続け、帰りの飛行機に間

一髪で間に合うというおまけも土産話になった。

(1984年人間科学部卒)

山頂へは現役のみで

夏合宿の劔岳山行

山岳部前主将 丸岡 漠

昨年8月18日から20日にかけて実施した現役部員による北アルプス劔岳山行について報告します。一昨年の北穂高岳に続く山行で、現役部員6名、OB4名が参加しましたが、劔岳山頂へは現役部員のみでの登頂となりました。

〔18日〕前日の夜行バスで大阪を出発、早朝に富山駅に到着しました。バスの都合上、駅で1時間余り待たされましたが、日の出前だったので肌寒かったです。その後、OBと合流して室堂へ向かいました。10時前に室堂バスターミナルに到着後、雷鳥沢経由で劔沢へ。劔沢にテントを張った後、周辺を散策していると、登れそうな岩がチラホラ。このルート難しそうだね、と部員数名でいつものようにはしゃぎました。夕食はジャーマンポテトを食べ、翌日に向けて早めに就寝しました。

〔19日〕午前6時にテント場を出発、一服劔、前劔を経由して10時15分に劔岳山頂に到着しました。最も簡単なコースでしたが、OBの参加なしでの登頂となり、少し不安でした。難所と言われるカニの縦ばい、横ばいも普段練習しているボルダリングの成果か、楽しくこなすことが出来ました。3,000m峰からの景色はやはり格別で、道中の疲れも気にならないくらい素晴らしいものでした。帰り道にヘリが登山者を救助しているのを見かけて、最後まで気を緩めることなくテント場に戻ることが出来ました。夕食にはカレーをいただきました。

〔コースタイム〕出発(6:00)―一服劔(7:00)―前劔(8:16)―劔岳山頂(10:10)―下山開始(10:59)―前劔(11:57)―一服劔(13:00)―テント着(14:35)

〔20日〕午前7時ごろ、劔沢出発。2日前に来た道に戻って室堂バスターミナルへ。多くの部員に疲れが見

えながらも室堂到着。雷鳥沢キャンプ場近くの階段が急な登りで長かったので、とてもしんどく感じました。富山駅では時間があったので、駅前の銭湯に入り、各々昼食をとったり、土産を買ったりして過ごしました。某部員が銭湯に忘れ物をし、電車の発車時間ギリギリに雨の中を走って取りに行くというハプニングがありました。ながらも無事大阪に帰ることが出来ました。



劔岳頂上で

大きなハプニングやケガ人もなく、合宿を終えることが出来ました。現役部員は1回生から3回生が2名ずつの構成で、前年から引き続き山行に参加したのが3名、それ以外の3名は本格的な登山は初めてで

した。心配だった体力面も問題なく、全員が快い緊張感の中で登山を楽しむことが出来たと思っております。今回の合宿は滞在期間も短く、コースも一般的なものであったので、今後は長期間に及ぶ山行や難しいコースに挑戦するなどして山岳部全体を盛り上げていけたらと思います。

今回の山行もOBの方々にとくさんのお力添えをいただきました、感謝申し上げます。今後もこのような機会を持てたらと考えております。参加いただいたOBは次のみなさんです。

山田靖則、草尾寛、奥山宏臣、森藤正人

◇

これ以外の昨年度の主な活動は、不定期でしたが、中之島山岳部と合同の定例山行が行われました。ボルダリング活動では、部内試合を行ったり、数名の部員は対外試合に参加したりもしました。またインドアにとどまらず、山梨県の瑞牆山などでボルダリングを行ったりもしました。本年度も山岳部のますますの発展を目指し、登山、ボルダリング双方に力を入れて活動していきたいと思えます。

なお、今年度は山本悠磨君(工学部応用理工学科)が主将を務めます。

喜寿の劔岳早月尾根

横尾 秀次郎

2017年6月、念願の南アルプス光岳を出雲路敬孝、石原敏雄両氏に助けられて、ようようの思いで登った。下山後の飲み会で、「これで高い山はおしまい！」と宣言したところ、「まだまだ行けますよ」から「そおお？」になって、「じゃあ、早月尾根から劔へは、まだ登ってないなあ」「えっ?」。慎重協議のすえ、「じゃあ行きましようか」というご意向を頂いた。

喜寿を迎えた昨年7月21日、この両氏とともに富山から上市に着き、タクシーで馬場島へ。馬場島荘に泊まる。翌朝5時半に出発したが、すでに28℃という異常高温。樹林帯の急坂を汗だくになって登り、13時過ぎに早月小屋に着くことが出来た。立派な小屋で、荷はすべてへりで運ぶそうだ。小窓尾根と素晴らしい日没の眺め。

翌日は長い一日となった。5時35分出発、2時間で樹林帯を抜ける。10時に頂上への分岐に着き、空身で10時半に頂上着。黒部湖、八ツ峰、長次郎・平蔵雪渓——よく見渡せる。分岐に戻り、カニの横ばいを下る。平蔵の頭、前劔、一服劔と気の抜け

ない下りが疲労を募らせる。15時、黒百合のコルでようやく緊張から解放される。17時にやっとの思いで劔御前小屋に着いた。早月尾根からの劔岳縦走は無事終わったが、8^キの荷での劔岳からの下りはさすがに相ななものだった。

去年暮れ、NHKテレビの「劔岳の謎」という番組で、昔、劔岳山頂に錫杖を置いた修験者がどの道をとって山頂に達したかという推理をして、そこを歩くという放送があった。尾根は水が得られない、ブッシュで歩くのが困難である、という前提で、立山川を溯り、早月尾根への沢を詰めて、今の早月小屋の1^キほど下で尾根に出て、あとは尾根伝い



黒百合のコルで。左から横尾、出雲路、石原

に山頂に達したのだからという推理であった。しかし、大峰山奥駆けの修験者や東北のマガギたちは自分たちで道をつくり、季節を選んで山々を回った。私は、劔岳も早月尾根末端から年月をかけて踏み跡道をつけ、残雪を踏んで、ついに頂きに達した、と単純に想像している。

翌日、前の日と比べればハイウェイのような道を辿って立山を越え、10時には一ノ越に着いた。さらに薬師岳を目指す石原氏とここで別れ、東一ノ越へ向かう。ここから見下ろすタンボ平で夏合宿したのは1963年、黒部ダム完成の年である。頭上にロープウェイが浮かんでいるが、タンボ平は今もほとんど人が通らない静かな別天地で残っていた。14時半に着いた黒部平は観光客でにぎわっていた。黒部湖から扇沢、さらにバスで長野に出て、新幹線で東京に戻った。

年を取ると、登りは少し時間がかかるだけだが、自覚しないバランス感覚の低下に加えて筋力も衰え、下りが厄介になってくる。もう一度、今回と同じ道を辿る気力はさすがにない。これからは街道を歩いたり、もう少しおらかな山をゆっくり歩いたりしてみたい。

(1964年工学部卒)

70周年行事で意見交換

2019年新年会

2019年の新年会が2月12日午後6時から阪大中之島センター2階、カフェテリア「スコラ」で開催されました。現役部員にも参加を要請しましたが、追出しコンパと重なり、会員のみでの開催となりました。

参加者は大野義照会長以下、久々の木村裕一さんや東京から駆けつけた石原敏雄副会長ら11名でした。昨年夏の白馬集会后の神の田圃訪問や現役の夏山合宿の写真の公開、ICIMOD(国際山岳総合開発センター)が2月に公表したヒンドゥーク



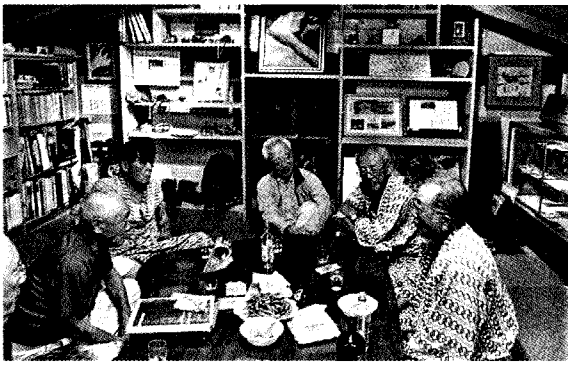
少しさびしいかな……

シユ山城の水河縮小の資料紹介など、盛りだくさんの話題と会創設70周年記念行事のプラン紹介で活発な意見交換の場となりました。

神の田圃散策も

2018年白馬集會

恒例の白馬集會が昨年9月1日、白馬村・対岳館で開催されました。常連の方々に不参加が出て、参加者は8名と寂しい限りでしたが、与兵衛俱樂部での二次会では、大野義照会長から山岳会の70周年または75周年への取り組みや白馬集會の今後のあり方について問題提起があり、簡単な意見交換が行われました。具体



与兵衛俱樂部で

的なことについては今後、案を練る方向となりました。

当初計画していた水河調査が行われている唐松沢への山行は、諸般の事情で中止となりましたが、2日には希望者で梅池方面(神の田圃など)の散策を行いました。

また、現役と共に大雪溪―白馬―唐松縦走後、集會に参加する計画もありましたが、現地の天候悪化で中止となり、現役の集會参加がなくなったのは残念でした。

参加者は次のみなさん。
大野会長、兼清喜雄、野田憲一郎、高田邦雄、豊坂昭弘、山田靖則、稲垣佳夫、田中喜樹

東京支部だより

春の懇親会に13人

東京支部恒例の春の懇親会は3月30日正午から、港区の新橋亭新館(新橋駅そば)で開かれ、50代若手から80代までの総勢13名が出席し、中華料理を楽しみました。

最長老の兼清喜雄さんの乾杯の音頭でビールと紹興酒を次々と空け、和気あいあいとした雰囲気の中で、現役当時の六甲山でのシゴキ?の思い出や近況報告で大いに盛り上がりました。そのあと、出席者全員から

スピーチがあり、多くの会員が海外を含む登山・巡礼・サイクリング・ゴルフなどを常時楽しんでいる様子がかがええました。

最後に、会員の高齢化など阪大山岳会が抱える課題と対応策を話し合い、今年開催される予定の会創立70周年記念行事に東京支部からも積極的に参加しようと呼びかけ合って散會しました。

〔出席者〕(敬称略、卒業年次順)
兼清喜雄、酒井次郎、前澤祐一、横尾秀次郎、出雲路敬孝、石原敏雄、鹿野慎吾、高橋正身、井上太一、上松一雄、松浦壽彦、村田正弘、畑秀信 (井上記)

会員の近況

総会や白馬集會の出欠はがきなどから抜粋。その後の変動は未確認。
卒業年次順 西暦。敬称略

二木 節夫 (工54) 昨年、運転免許を更新しました。あと3年、91歳まで運転できますが、行動範囲は岐阜市内に限っています。趣味の囲碁は今も週10回くらい基會に参加しています。杖をつかずに散歩しますが、2千歩程度で切り上げています。
岩永 剛 (医55) 週1回、大阪国際がんセンターへ通っています。

しかし、少しの坂道でもフーフー言い、元山岳部員として恥ずかしい限りです。

木村 裕一 (経56) 米寿ともなると、さすがに体力的にも衰えたことを感じます。

鷺沢 忍 (工56) 退職後、軽い登山と旅行を続けていましたが、70歳代後半からはドライブがメインの旅行になって、山からは遠ざかりました。さらに一昨年、肺がんが発覚し、もはや戶外活動は無理な状態です。

横井 保枝 (文56) 80歳代になって昔登った山を見る旅をいくつかりましたが、今はそれもかなわなくなりました。テレビで見ればかりです。

樋下 重彦 (工58) 昨年は立山黒部アルペンルートのツアーで、懐かしい山々を乗り物で見に来ました。近頃は街歩き専門で、都内や横浜近郊の歴史散歩などをやっています。

兼清 喜雄 (工60) 今のところ健康状態は良いので、相変わらず、ほとんど毎週、ゴルフと山登り、ハイキングに出かけています。

白井 達郎 (工62) 体調はやや安定し、息切れしながらウオーキングを心がけていますが、年齢には勝てません。

山本 彰三 (法63) 水泳、ゴルフでリハビリに努めているせいか、脚力、心肺能力は上がっています。

高田 邦雄 (経65) 2年余り、脚の動脈硬化とふらつきで長い距離が歩けません。登山はもちろん、野鳥の会の観察会もサボりがちです。

出雲路 敬孝 (工67) 昨年は4月に甲斐駒(途中敗退)、7月に剣立山に横尾先輩や石原さんと登ったほか、丹沢山系に何度か登ったのと、街道歩きをあちこちやりました。青梅旧街道の奥多摩湖側、大菩薩登山口から大菩薩峠を越えてから先が昨年来の宿題になっており、いつ登ろうかと思っています。

畑中 薫 (医69) 近況に代えて2年生の夏だったと記憶している。数名の部員たちと黒部川支流の柳又谷の遡上に挑んだ。晴天下の沢登りは無上の快感だったが、私が滑落して沢に流されたのである。私は泳げなかったが、幸い、背負っていたザックの浮力と大きさと下流の岩の間に挟まって助かった。この計画は無謀だった。それを痛感して夏休みに開かれていた浜寺水練学校を受講し、立ち泳ぎや数キロの速泳ができるようになった。

また、剣岳登頂を目指した冬季合宿で、数日間、吹雪で動けないことがあり、テントの中で仲間と喫煙した。その習性は66歳まで続いた。その祟りか、73歳の時に肺がんが見つかって右肺上葉切除術を受けた。今

は75歳だが、先日の検査での肺活量は55歳男性の平均値だったという結果に驚き、喜んでいる。

岡田 謙治 (法69) 相変わらず、年中、琵琶湖でセーリング。冬は梅池でスキー。家では四六時中、パソコンで3DCG(3次元コンピュータグラフィクス)の制作で遊んでいます。

中岡 和哉 (医71) まだ診療所をやっています。山もスキーもやめて久しくなりました。

鹿野 信吾 (理71) クリニックの院長を交代し、週3日勤務と仕事量は半減しました。しかし、なぜか結構忙しく、追われる生活を続けています。人並みのゴルフ、自転車、図書館通いなども楽しんでいます。

藪本 勝 (工72) 昨年も個人山行を楽しみました。①3/18、26飯豊山Ⅱ3度目の挑戦でやっと本峰に登頂できました。穏やかな東北の山ですが、強風とホワイトアウトが鬼門です②4/16、21南アルプス白根三山Ⅱ避難小屋を利用する予定でしたが、農鳥小屋が雪に覆われて利用できず。その日はツェルト泊でした。平屋の小屋に注意を③5/6、12北ア槍ヶ岳&奥穂高岳Ⅱ人気の山です④7/2、3飯豊山ダイグライ尾根&石転び沢Ⅱ飲料水無しのダイグライ尾根は要注意です⑤7/12、26北

海道の旅Ⅱお花畑を満喫しました。秋は体調不良で、山を楽しめませんでした。今後とも体力が続く限り山を楽しみます。

井上 太一 (理73) 最近、アメリカのゼロシューズ社のトレイル用サンダル(両足で330グラム)に凝っています。毎週、これを履いて高尾山を往復しています。今週は新宿駅から我が家まで34キロを7時間半かけて歩きましたが、軽くて足に負担がかからず快適でした。夏にはこのサンダルを履いて奥穂高岳に登るつもりです。

上松 一雄 (工75) 1月末から2月初めの1週間、家内とタスマニアへ行きました。クレードルマウンテンに登りましたが、レベルは低いものの岩登りになり、日ごろ使わない手が疲れました。兵庫県の氷ノ山には夏に何回か登りました。今のところ週3日は丸の内(以前は品川)でしたが、1月から、2日は高砂で勤務しています。

松浦 壽彦 (工75) 67歳になりましたが、週5日、吊り革を使わず満員電車通勤。歩行は1日6千歩。週1回はジムで筋トレ。冬場は月1ゴルフで健康管理、月1帰省で実家周りの耕作放棄地の草刈り(イノシシ対策)。

大宅 幸夫 (歯76) いろいろアウ

トドアの趣味が続けていますが、まったりモードになってきました。昨年からは四国遍路を再開しましたが、高知県の遠いところばかりになり、歩き遍路が減ってきました。

村田 正弘 (工81) 昨年は家内と剣岳に行きました。カニのたてばい、よこばいは厳しかったです。

野口 明 (基83) 週末は相変わらずアイスクライミングに出かけております。年末年始はカナダのロッキーマウンテンに宮崎県の比叡山ロングルートに行ったりしています。3月からは山スキーと岩登りになります。

奥山 宏臣 (医84) 1月の連休に比良山に行ってきました。前半はトレースがなく、久しぶりに真剣にラッセルをしました。後半はよく晴れて武奈ヶ岳からの景色を満喫しました。また5月に行こうと思っています。

今村 義弘 (工84) 休日は撮り鉄、レトロ銭湯めぐり、軽登山を6.3.1.くらい割合で楽しんでいます。軽登山は自宅(横浜)から近い丹沢が中心で、昨年11月に鍋割山、今年2月に少し雪がついた大山に登ってきました。昨年から運動も兼ねて銀座の好日山荘のジムでボルダリングも時々やっています。学生時代に使っていたクレッターシューズを30

数年ぶりに履きました。

藤田 繁雄（医91）クリニックを開業して4年目に入りました。5月の10連休、休まざるを得ないとすると、山に入る絶好のチャンス？太りすぎた身体を絞り始めました。17年ぶりに雪の北アを目にすることができるか？

藤好 喜久（理07 旧姓網野）ご無沙汰して申し訳ありません。息子が小さいため、登山は休み中です。

追悼

三澤 日出夫氏 昨年10月20日、

肺炎のため死去、79歳。1963年工学部溶接学科卒。古河電工、日本アルミに勤めた。69年の第3次ヒマラヤP29峰遠



征に参加したほか、76年には阪大カラコルム・アプサラサス峰遠征隊長を務め、初登頂に導いた。自宅は岡山県倉敷市。

苦勞かけたアプサラサス

稲垣 佳夫

2016年8月7日、アプサラサス登頂40年を記念して阪大中之島センターで記念集會が開かれた。参加

した元隊員は6名であったが、三澤隊長とは40年ぶりに再会した者もあり、尽きることのない思い出話に花が咲いた。隊長は、「体を2、3か所切って、あまり飲めんのや」と言いながらも、さかんに飲んで語り、「山だけがつまみの飲み会は久しぶりだった」と気持ちよさそうな顔で岡山へ帰られた。

アプサラサス登山は隊長にとつて苦勞ばかりだったろうと思われる。役人からポーターまで、何かについても要求ばかり繰り返すパキスタン人は腹立たしいものであったろう。帰国に際して「たとえ国賓で招かれても、オレがこの地を踏むことは二度とないだろう」とつぶやかれたのが印象に残っている。

登山は5月24日、キャラバンを発し、BC（5、000m）建設まで約1カ月半、ポーターを帰して隊員だけの荷上げと登攀が1カ月、帰途半月と計約3カ月になった。C3設置までは18日と、好天に恵まれて順調に進んだ。隊長も隊員と一緒に荷上げに精を出された。ところが、あとはC4（7、000m）設置だけでアタック態勢が整うというところで天候が一変して悪化。C4建設は9日後、上げることのできた食料は4人の3日分、1チャンス分だけであった。

C4設置後は、翌アタック予定日は風雪。2日目も夜来の風雪。祈る気持ちで天気待ちするも、朝9時頃だったか、「本日をもつて全ての登攀活動を終え、撤収する……」と、トランシーバーを通して隊長の苦渋の決断が伝わってきた。呆然自失でノロノロとC3へ下山していたところ、昼過ぎに突然、雪雲が掃われ、晴天になった。「何とか、もう一度行かせてほしい」との訴えに、隊長から「最後の1日に賭けよう」と許可が出て、3名が再びC4に引き返した。

翌日は快晴。6時45分に出発し、9時過ぎ登頂。正午、C4帰着。C4には食糧がなく、C3まで下らねばならないが、ここでどつと疲れが出て、3人とも動けなくなった。隊長に「仮眠させてほしい」と頼み込み、2時間休息後、再下降。17時にC3へ下山した。C3に1人残る隊長は「よく帰ってきた」と顔をクシヤクシヤにして迎えてくれた。

冒頭の記念集會で、「隊長の手記には、C4には3日分の食糧が残っていたとあるが、実は1日分しかなく、リスキーな判断でしたね」と問うと、「分かっておる。でも、おまえらを信じたんや」と笑っておられた。昨年10月、隊長の計報を聞いた時、真つ先に浮かんだのが、この集

会での隊長の楽しそうな顔だった。「40年後に皆で集まり、隊長の顔を見ておくことができ良かった」というのが元隊員の想いだらう。御礼とともに、ご冥福をお祈りしたい。（1972年工学部卒）

いぶし銀のような存在

田中 喜樹

三澤さんと初めてお会いしたのは2年生の時、剣沢二股での夏合宿でした。50年以上前の話ですが、麦わら帽子をかぶって現れました。OBが夏合宿に来るのは稀で、びっくりしました。

次は工場実習で日光の古河電工でお会いしました。約3週間の実習中、一度、中禅寺湖の奥の滝を見に行き、帰りに湖畔の喫茶店でコーヒーをごちそうになりました。歩くのが速く、私はまだ現役だったのに付いて行くのがしんどかったです。

1969年の第3次P29隊に一緒に参加しました。神戸港から船に乗ってバンコクまで、三澤さんと渡部、黒田、甲田、私の5名で楽しい船旅でした。途中、フランの切り下げで1日の小遣いが増え、為替の仕組みを教えてくださいました。何せ小遣いは1日ごとしか支給されませんでした。まとめて渡すと良からぬことを

しでかす、との住吉隊長の言いつけだったと思います。香港ではリパルスベイに泳ぎに行きました。映画「慕情」の舞台で、先輩は狙いをつけていたようです。

山での煙草は3日に1缶、ピースが支給されていました。しかし、三澤さんはそれでは足りず、BCでは夜遅くテントに來られ、「貯蔵品を出せ」とせがむ愛煙家でした。

登山中はパーティーを組んだことはあまりなかったと思いますが、一度、東尾根P1をトラバースする危ないルートで一緒だったことは覚えていいます。若手が先頭に立ち、中盤のまとめを玉井さんと三澤さんで固めていたと。

アプサラサス峰遠征から帰ってこられたあとは大阪の日本アルミに再就職されましたが、やがて大腸がん(癌)を発症され、人工肛門を付けられました。その後、倉敷に帰られたと聞き、岡山で学大会に出席した帰りにお訪ねして、楽しく飲みました。私が声門がんと診断された時は、喉頭がんで岡大病院に入院されています。たまたま私たち夫婦が結婚40年の祝いを岡山の奥の温泉ですることになり、見舞いに寄ったところ、抗がん剤が劇的に効いて放射線治療に移行したとのことでした。

昨年2月には、しまなみ海道で仕

事があり、またお寄りしました。私も退院して1年だったので、がんについて色々話をしました。「歩くのが遅くなった。嫁さんにも負ける」と嘆いておられました。

色々書きましたが、一言でいえば、いぶし銀のような方だったと思っております。先輩、色々ありがとうございます。

(1973年工学部卒)

打出 英樹氏 昨年11月12日、急性白血病のため死去、79歳。

1962年工学部構築工学科卒。大林組で主に設計畑を歩き、設計部長、神戸支店長などを務めた。



現役時代は59年春の黒部川上廊下積雪期初横断山行、61年春の劔岳八つ峰縦走などに参加した。自宅は兵庫県宝塚市。

頑強なロマンチスト

前澤 祐一

昭和31年、私が神戸高校2年生で山岳部に入った時が、打出英樹との出会いだっただ。その後、同期の彼と共に阪大山岳部に入部し、卒業するまで山歩きの先生だった。がっちりした体つき、堅実な話しぶりで、高

校でのあだ名は「オヤジ」だったが、なかなかのロマンチストで、山岳雑誌の「アルプ」を愛読していた。

入部した33年の夏山合宿では、合宿後の縦走に劔・薬師岳・烏帽子・白馬のルートを選択して、当時、秘境とされた雲の平、高天原に1日遊んだ。その報告が20人近くいた同期入部のメンバーに雲の平ブームを起こした。

卒業後、大林組に入り、設計部長であった打出は、平成13年の阪大山岳会50周年記念として白馬山麓・八方の対岳館に設置されることになった記念碑の基本計画、デザイン、石の選定など全般にわたって貢献した。対岳館の記念碑を見るたびに彼を思い起こす。

(1962年工学部卒)

辻 信雄氏 5月21日、くも

膜下出血などのため死去、75歳。1967年工学部原子力工学科卒。卒業後は総合商社の日商岩井(のちに企業統合で「双日」)に勤めた。山岳部では65年春の劔岳北方稜線山行などに参加し、大きな体でのポツカヤラッセルで勇名をさせた。自宅は川崎市。

加藤 幹太氏 1月7日死去、91

歳。1952年、理学部生物学科卒。

旧制浪速高校山岳部出身で、本会設立時から会員。49年厳冬の白馬岳主稜登攀の第1次アタックや明神岳南峰南稜、北岳バットレス登攀など発足初期の本会での中心的な活動をした。理学部卒業後は大学院、医学部助手を経て、京大理学部へ。放射線生物学が専門で、京大理学部長、滋賀大学学長などを務めた。本会からは先年、退会。自宅は滋賀県大津市。

京極 与壽郎氏 昨年10月5日死去、97歳。1947年、工学部応用化学科卒。同科助教などを経て倉敷紡績に入り、取締役・技術研究所長などを務めた。本会特別会員だったが、山行歴などは不明。自宅は大阪府羽曳野市。

編集後記

会創設70周年の年。会報も関連記事で埋めたいところですが、記念行事はこれからとあって大野会長と野田氏の随想だけに留めました。畑氏の台湾大峽谷紀行は東京支部からの通報で投稿をお願いしたものです。会報づくりは会員のみ皆さんの情報提供が頼り。これからもご協力よろしく願っています。

(会報担当・高田邦雄)